はじめに

印象派は「発明」されている

印象は個性であり、鑑賞は表現である

印象派は「発明」されている。

私たちの知っている個性の表現としての絵画は、この発明によって生み出されたものであり、発明者であるモネによれば、画家の個性は画家の感じた「印象」にあるという。

であるならば、私たちが絵画を見て感じた「印象」もまた、私たちの個性であることになり、絵画を鑑賞することは、私たちの個性の表現に他ならないことになる。

印象派の軽やかな画風は、チューブ入り絵の具の発明で絵画が屋外で描かれ始めたことから生まれたものだが、この携帯画材で自分の「印象」を描いたモネは、抽象絵画の起源ともなった新しい絵画を発明して、私たちと絵画の関わり方を変革しているのである。

二〇二四年、印象派の誕生一五〇周年を記念して、印象派の殿堂オルセー美術館で開催された展覧会は、「パリ一八七四年　印象派の発明」と題されている。

チューブ入り絵の具。パリ、ルフラン社のカタログより。1886

クロード・モネ『印象 日の出』1873　部分

ジョン・シンガー・サージェント『森で制作するモネ』1885 頃　右は妻のカミーユ。

屋外制作がモネを光の画家にした

屋外での制作は絵画に、従来よりはるかに鮮やかな色彩をもたらすことになった。

モネが、私たちの知る光の画家となるのはこの屋外の色彩を得た後のことで、当時の画家の登竜門とされた「サロン」という公募展に入選した若きモネの作品は、まだ別人のように暗い色彩で描かれている。

モネ『緑衣の女』1866　25 歳のモネがカミーユを描いて念願だったサロン入選を果した作品。批評家にも高く評価された。

モネ『散歩 日傘の女』1875　部分　屋外の光と軽快なタッチが彩るヴェールのカミーユ像。

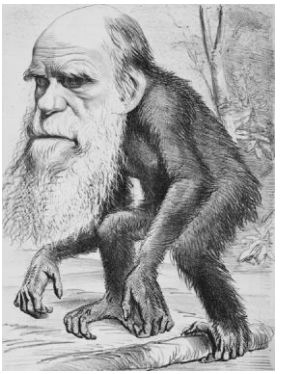
モネが印象派を代表する画家となるのは、セーヌ河畔の屋外制作で新たな絵画の手法を発見した後、画家仲間と会社を設立して、絵画の自主流通のための展覧会を開催した以降のことであった。この「画家、彫刻家、版画家等、芸術家株式会社　第一回　展覧会」の出品作『印象　日の出』の革新的な画風を皮肉った「印象派の展覧会」という新聞記事のおかげで、モネは印象派という新奇な画家集団の頭目と見なされたのである。

当時、絵画は筆の跡を残さないように丹念に仕上げない限りは完成作品と見なされず、屋外で即興的に描かれた絵画は、未完成品としか映らなかったのである。

そんな作品を公開するなど言語道断として、この展覧会を「絵画の革命、恐怖の開幕」と評した戯画が新聞に掲載されるほどであった。フランス革命の流血の歴史もまだ記憶に新しかった時代に「革命」と例えられたことからも、印象派が人々に与えた衝撃の大きさが推察される。当時はでたらめとしか思われなかった印象派の画風は、以降、猿の描く絵や猫がピアノの鍵盤を踏む音楽などに例えられ続けることになる。

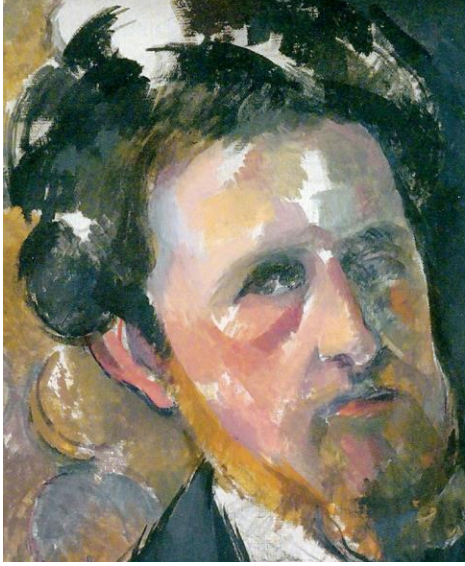
ダーウィンの『種の起源』をむさぼるように読んだ自然主義文学の巨匠エミール・ゾラは、印象派を「絵画の進化」と称賛したが、こうしたわずかな理解者を除く大半の人々にとって、印象派は正気すら疑わしい謎の画家集団としか映らなかったのである。

第１回印象派展の作品に驚いて逃げ出そうとする来場者の姿を描いた戯画。「絵画の革命、恐怖の開幕」と書かれている。当時人気の諷刺新聞「シャリヴァリ」に掲載された。戯画の作者は、同紙に４万点を超える作品を寄稿したシャム。1874



進化論を嘲笑して、ダーウィンを猿に見立てた戯画。イギリスの諷刺雑誌「ザ・ホーネット」に掲載された。ダーウィンを熱読していたゾラは、猿の描いた絵と嘲笑された印象派の作品を「絵画の進化」と評して称賛している。1871

革命の恐怖と脅えられ
絵画の進化と称えられ



右：ポール・セザンヌ『ガスケの肖像』1896 部分 ラフな筆致で色面を貼り合わせるように描くのがセザンヌの特徴。髪の描写に平筆特有の方形の筆跡が見えている。
左：レオナルド・ダ・ヴィンチ『モナ・リザ』1503 部分 筆の跡を残さぬ写実描写の極致とされる「神秘の微笑」は、セザンヌの目指した表現の対極に位置している。

印象派の筆致の中でも、保守的な人々の神経を逆なでしたと思われるのが、新開発の金属の口金を用いた平筆の塗り跡で、ペンキの刷毛による「塗装」を思わせるこのタッチほど、「古き良き絵画」に不似合いなものはなかったであろう。『印象　日の出』を酷評した新聞評は、描きかけの壁紙以下と決めつけている。

新開発の金属製の口金を用いた平筆（右）と従来の紐で巻いた丸筆（左）を掲載した当時の画材カタログ。年代不詳

ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ『自画像』1889　部分　絵の具がうねるようなゴッホのタッチ。

職人仕事の手描きの壁紙より雑な仕事と見なされたわけで、同様に、平筆の跡も露わに立体感を描いたセザンヌや、うねるような筆致で内面を表したゴッホも、まっとうな画家とは見なされず、新聞には印象派の作品を武器に戦う兵士の戯画まで掲載されている。

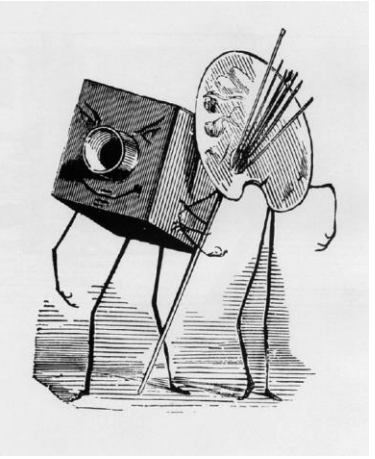
いみじくも、最前線の兵士を指す「前衛」すなわちアヴァンギャルドという軍事用語が芸術用語として一般化したのがこの頃のことで、絵画に、旧来の写実描写を超える前衛的な表現を確立することが迫られていたのも事実であった。

写真を軽蔑したゴッホと脅えたピカソ

その最前衛たるゴッホは、筆の跡も残さぬアカデミックな写実絵画を「写真まがい」と軽蔑していたが、一世代後の前衛画家ピカソは、写真の発明を絵画の死亡宣告と見なしていた。近代人の心象風景を描いた『叫び』(1893)で知られるムンクによれば、ピカソは写真が絵画に取って代わることを本気で心配していたという。

実際に、写真を目の当たりにして「絵画は死んだ」と叫んだアカデミーの画家もおり、写真の普及で失業したり写真家になったりする画家も続出したが、ゴッホに傾倒していたムンクは、天国や地獄を撮影できない限り写真は恐るに足らないと一笑に付している。

写真に脅えた絵画のアヴァンギャルド（前衛）化



絵画が写真に屈服する姿を描いた戯画。うなだれた横顔のパレットが、得意満面のカメラに対して美術展に参加するよう申し出ている。戯画の作者は、芸術家や著名人の肖像写真を多く撮影したことで知られる写真家のナダール。1859

前線の兵士が印象派の絵を武器にする場面を描いたシャムの戯画。第3回印象派展が開催された1877年に「シャリヴァリ」紙に掲載。

右：ピエール＝オーギュスト・ルノワール『食後』1879　カップの絵柄が他の部分より繊細なタッチで描かれ（左図）、少年時より積んだ修業の成果を物語っている。

器の絵付け職人から画家へ

対照的に、写真技術の発達のおかげで画家になったのがルノワールであった。

少年の頃から食器や壺に絵付けをする修業をしていた彼は、写真を応用した機械技術による量産品に仕事を奪われ、画家に転身したからである。ルノワールの作品に描かれた壺やカップの絵柄には、その修業を物語る流麗なタッチを見ることができる。

磁器で知られるリモージュで生れ、パリで修業した職人の仕事を十七歳で失った彼は、扇子絵やカフェの内装等で食いつなぎながら通い始めた絵の塾で、共に印象派を代表する巨匠となるモネと知り合っている。

ルノワール『春の花』1866　印象派のタッチを確立する以前の写実的な作品。壺の絵付けが見事。

この二人に、先輩画家のドガが加わり、印象派と呼ばれるグループが形成されることになるのだが、今日と違って当時の画家が作品を発表できる機会は極めて限られていた。

画家の登竜門は、アカデミー主催の公募展であるサロンしか存在せず、美術業界に影響力を誇る批評家の目に留まるにはその入選が必須であった。落選者の中から自殺者が出るとまでいわれたサロンの独占体制に対抗する試みが、モネ達の開いた自主流通展だったのだが、印象派という悪名以外はさしたる成果は得られずに終っている。

最下級の風俗画と見なされた印象派

印象派がアカデミーやサロンで不評だったのは、斬新な手法もさることながら、彼らが描いたパリ市内やセーヌ河畔の同時代風俗という題材にも原因があった。

当時のアカデミーで王道とされたのは、聖書や神話を題材とした「歴史画」と呼ばれる絵画であり、印象派の画家達が描いた近代パリの都市風俗やセーヌ河畔のリゾート風景は「風俗画」と呼ばれる最下級の絵画の題材と見なされていたからである。

これに抗して、同時代の女性を神話の女神に見立てて描いたのが、印象派の先輩画家のマネだったが、その意欲作は不謹慎の極みとして罵倒と嘲笑の嵐にさらされている。

「クリティック・インフルアント」すなわちインフルエンサーの大物批評家のサロン会場での「プロムナード」つまり練り歩きを描くドーミエの戯画。行き交う画家達が帽子をとって挨拶をしても無視したまま、作品批評のメモに余念がない。1865

練り歩くインフルエンサー批評家と画家達の狭き門

サロン落選に絶望する画家達を描いた戯画。画家の背後に立てかけられた作品のキャンバスの裏に「REFUSÉ（落選）」と書かれている。作者は当時を代表する戯画作家オノレ・ドーミエ。1855 頃

ティツィアーノ『田園の奏楽』1510頃　若者に音楽の霊感を与える詩の女神ミューズを描くルネサンス名画。若者達にはミューズの姿は見えない設定になっている。

女神でなく人間のヌードを描いたおかげで下品で不道徳とされたマネの変革に学び、同時代の風俗や風景を題材とした上に、筆の跡を残さぬ写実絵画に対抗し、タッチも露わな絵画を描いたのが、モネであった。

アカデミーや批評家に、嘲笑され非難されるのは当然であった。

ドミニク・アングル『泉』1856　アカデミーの巨匠が36年を費やした、筆の跡を残さぬ写実絵画の極致。

上：エドゥアール・マネ『草上の昼食』1863　名画『田園の奏楽』の趣向を借りて当時の女性を裸で描き、轟々の非難を浴びた作品。下：アレクサンドル・カバネル『ヴィーナスの誕生』1863 『草上の昼食』が落選した年のサロンに入選、時の皇帝ナポレオン三世の買い上げとなったほど、当時は「芸術的」と絶賛された作品。

絵画芸術の「発明」と「独立」

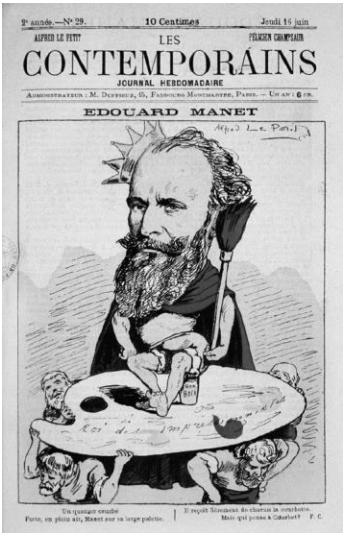
今日ではマネは近代絵画の父とされている。理想化されたヌードを聖書や神話を題材に描いた絵空事ではなく、近代女性の「現実」の裸身を描いたからで、二十世紀フランスを代表する哲学者ミシェル・フーコーは、マネを絵画芸術の発明者としている。が、当時の人々はそんなマネを不道徳と怒り、理解者であったゾラも、マネの作品のルーヴル入りを予言する際には、わざわざ「ノストラダムスの向こうを張る気はないが」と断っている。

今となっては、その頃「高尚」とされたヴィーナスの方が、写実の妙技も手伝い扇情的に映るのだが、女神であれば裸も不道徳ではないというのが当時の建前であった。

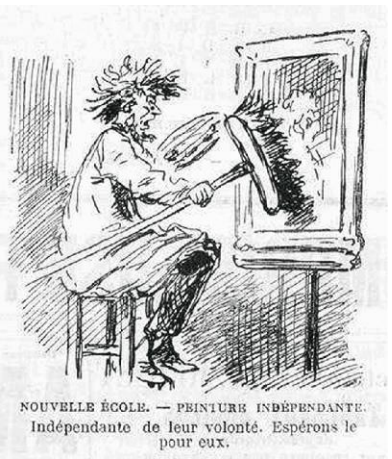
そうした古色蒼然とした絵画を刷新して、目の前の風景や風俗から個々の画家が感じた「印象」を描いたのがモネを筆頭とする印象派であり、このマネの現実主義とモネの印象主義によって、近代絵画の歴史は開幕することになる。

デッキブラシで描くとまで嘲笑された印象派は「アンデパンダン」すなわち「独立派」とも称され、後に開催される無審査の「アンデパンダン展」の創設の契機となり、今日のインディペンデント・レーベルいわゆる「インディーズ」の先駆ともなっている。

ノストラダムスばりに予言されたマネ
インディーズの先駆となったモネ



平身低頭する従者の担ぐパレット上の「印象派の王」マネを描く戯画。平身低頭を意味するcourbetteと、反アカデミーの画家で「見たことのない天使は描かない」と宣言したクールベcourbetをかけている。当時のマネは、印象派に限らずあらゆる革新的な画派の頭目と見なされていた。「レ・コンタンプラン」紙掲載のプティ作の戯画。1881



印象派の奔放な筆致を諷刺して、デッキブラシでキャンバスに絵の具を塗装中の「アンデパンダン」すなわちインディペンデント（独立系）の画家を描くシャムの戯画。平筆の跡を残す印象派の画風にあきれていたのであろう。1879

ジョルジュ・スーラ『グランド・ジャット島の日曜の午後』1886　この画家を参加させるか否かをめぐって印象派は二分され、印象派展はこの年を最後に幕を閉じる。

新時代の色彩を求めて

印象派は、絵画の色彩の輝きを探求したことでも知られている。

その基盤となったのが、ニュートンの光学やゲーテの色彩論を踏まえて、当時の科学者ヘルムホルツやゴブラン織の研究者シュヴルールが体系化した最新の色彩理論であった。

当時の画家達に決定的な影響を与えた王立ゴブラン研究所所長シュヴルールの色彩理論に基づく 1440 色の輪。今日の美術の教科書でおなじみの 12 色環の原型となっている。

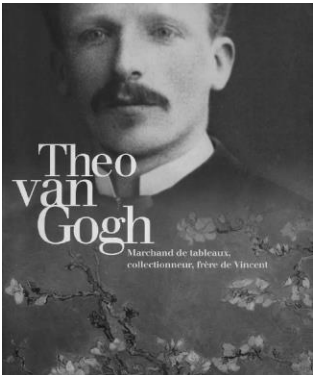
ゴッホ『星月夜と糸杉のある道』1890　部分　小刻みな色彩の線描にスーラの影響が見られる。

画面に色彩を斑点のように塗り、見る者の視覚の中で混色する印象派の手法は、これら最新の色彩理論を踏まえて編み出されている。絵の具は、筆で混ぜれば混ぜるほど色彩の鮮やかさや明るさを失うために、そうした彩度や明度の低下を防ぎ、観者の視覚でいわば光学的に混色することにより画面に鮮烈な色彩を実現したのがこの手法であった。今日の印刷におけるＣＭＹＫ（青・赤・黄・黒）によるアミ分解や、パソコンや携帯電話のディスプレイにおけるＲＧＢ（赤・緑・青）の信号分解の基盤となった色彩処理である。

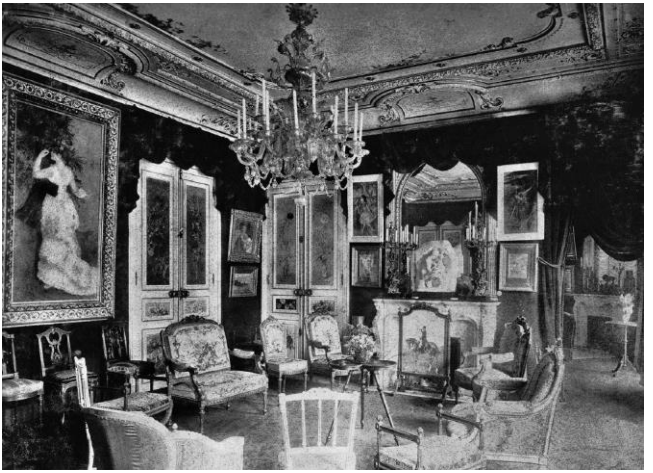
かくして近代絵画から今日のメディア技術の礎まで築いた印象派であったが、当初その真価は理解されず、その市場価値に至ってはほとんど皆無に等しかったのである。

市場の創成と印象派ブランドの確立

生前に絵が一枚しか売れなかったゴッホを経済的に支えたのは弟で画商のテオであり、彼に先立ち印象派の市場戦略を創案した天才的な画商がデュラン＝リュエルであった。



『テオ・ヴァン・ゴッホ／画商、収集家、ヴィンセントの弟』展カタログ　アムステルダム、ゴッホ美術館　1999



デュラン＝リュエルの自邸サロン。宮廷趣味のインテリアに印象派の絵画を展示、新時代のステータス・シンボルとして訴求して成功を収めた。左の壁面のいちばん目立つ位置にルノワールの『都会のダンス』（→ 23p.）が飾ってあるのがわかる。

ゴッホの献身的な弟と印象派の父とされた画商

画廊のデュラン＝リュエル。印象派やバルビゾン派といった当時最先端の前衛絵画を、前時代的なルイ王朝様式の金ピカ額縁に入れて展示している。1910 頃撮影